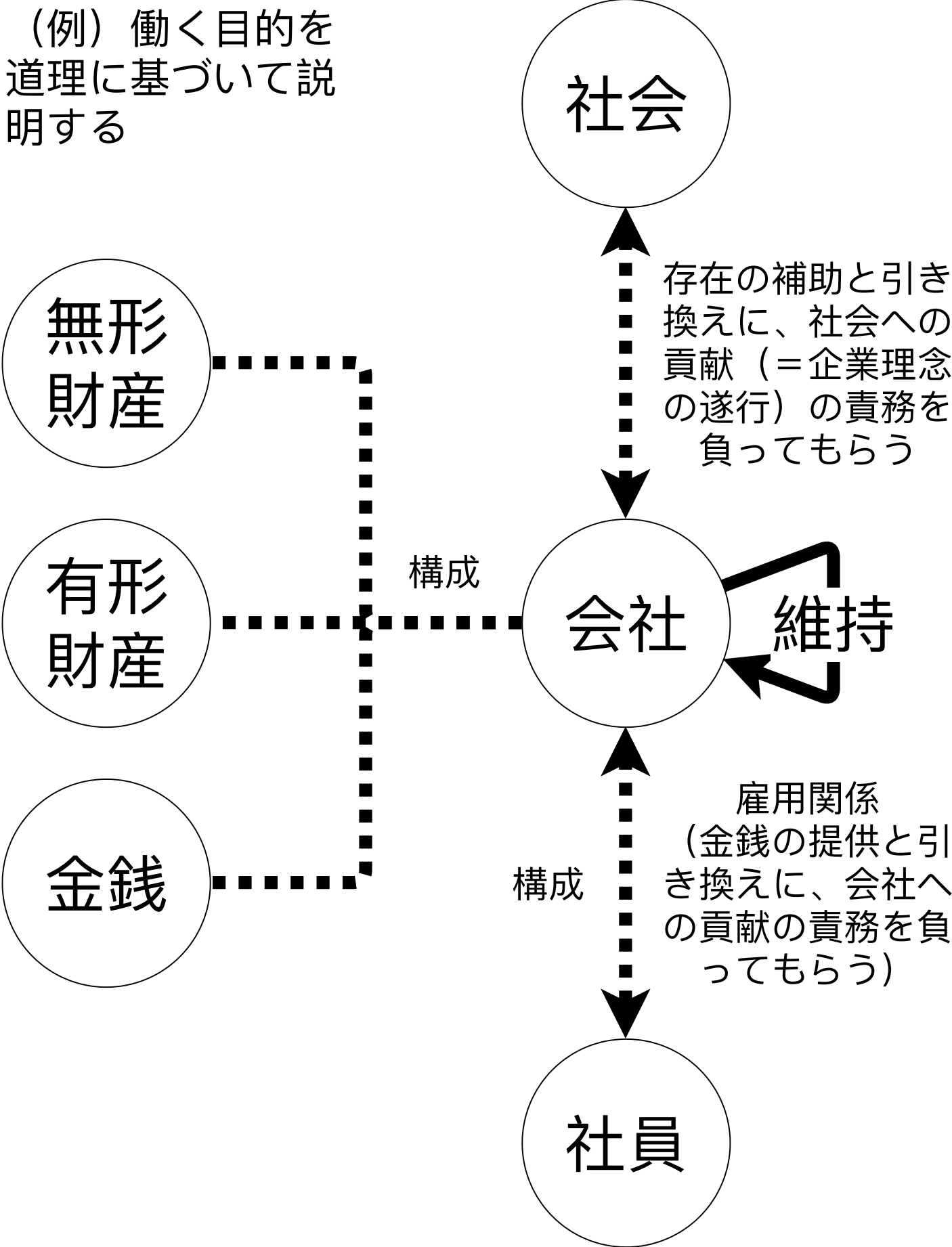


高度に抽象化されたこの世の姿（例）

2019.8.10 金田

（例）働く目的を
道理に基づいて説
明する



まず「社会」が存在し、
それが内包する形で「会社」が存在する
この二つの存在は、
「社会は、会社の存在を補助する」
「会社は、（その代わりに）社会への貢献の責務を負う」
という関係を持っている

「会社」という存在は、その構成要素である
「社員」
「金銭」
「有形財産」
「無形財産」
を良い状態に保とうとすることで、自身を維持しようとする

「会社」が自身を維持するための手段として、
「社員」と「雇用関係」を作るということを行う
これにより、「会社」と「社員」のそれぞれには
「会社は、契約内容に基づき社員に金銭を提供する」
「会社は、契約内容に基づき社員の維持に貢献する」
「社員は、契約内容に基づき企業理念の遂行に貢献する」
「社員は、契約内容に基づき会社の維持に貢献する」
ことが目的として与えられる

上記の関係の維持によって「社員」が得られるものは、
ずばり「金銭」と、「他社員」との「人間関係」である
この関係は、「個人」が、雇用関係により自身の維持が促進されると
判断した場合にのみ構築・維持され、
また、もし「金銭」「人間関係」が不要だと判断されれば容易に破棄
される。それは「個人」の価値観に基づく

つまり「個人」は、自身の維持（＝「心」「体」「自我」の維持）を
究極の目的としたうえで、それに貢献できると判断した場合にのみ雇
用関係を構築し、そうになったら、「金銭」と「会社による保護」と引
き換えに、「会社」に対して、「社員」「金銭」「有形財産」「無形
財産」「企業理念」のいずれかに貢献しなければならない